

みえ災害ボランティア支援センターについて

風水害や地震の被害から復旧・復興する過程で、災害ボランティアの果たす役割はたいへん重要になっています。三重県地域防災計画には「みえ災害ボランティア支援センター」（以下「支援センター」といいます）を、市民と行政の協働で設置することが明記されています。支援センターは市町単位を目安に設置される現地の災害ボランティアセンターを県域で後方支援するために設置し、県災害対策本部や県内の関係機関、また県外のボランティアネットワークや関係機関との連携・調整や、県内外への様々な情報の受発信などの支援を行う役割を担います。

■ 支援センター設置基準

- ① 災害が発生し、県内に現地センターが設置された場合
- ② 県内に震度6弱以上の地震が発生した場合
- ③ 幹事団体が支援センターの設置を必要と認めた後に開催する臨時会（参加団体で構成）で設置決議があった場合

東日本大震災発生の日後、3月14日に支援センターをみえ県民交流センター内に設置することを決定しました。同時にセンター長を選任、ボランティアによる事務局立ち上げと先遣隊の派遣を決定しました。先遣隊は被災地、および現地災害ボランティアセンターの情報を収集するとともに、現地災害ボランティアセンターの立ち上げにかかる支援を行うこととし、資金の調達を含めた具体的な業務計画を策定していきました。そして被災された方々が笑顔を取り戻し、地域が復興するまで、息の長い支援活動を三重県から展開することを約束した「東日本大震災復興支援みえ宣言」を謳いあげた「私たちにできることを考える緊急集会・みえ」を開催した4月11日を境に、本格的に活動をスタートさせたのでした。長期的な支援活動に備えるため、ボランティアによる事務局体制を専任の雇用スタッフ体制に整えたのもその頃です。

活動の方向性を決定する幹事団体は、日本赤十字社三重県支部、社会福祉法人三重県社会福祉協議会、特定非営利活動法人みえ防災市民会議、特定非営利活動法人みえNPOネットワークセンター、三重県ボランティア連絡協議会、そして三重県の計6団体、まさしく官民協働の組織です。

<幹事団体4代表からのメッセージ>



皆さんのボランティア活動が被災者を勇気づけ、被災地の復興につながります。これからも力を合わせて頑張りましょう。

日本赤十字社三重県支部

支部長 野呂 昭彦



被災地の社協や行政との連携を十分に図りながら、被災された方々に寄り添った支援を続けていきたいと思えます。

社会福祉法人
三重県社会福祉協議会

会長 森下 達也



東日本大震災は、人の命の儚さと、自然界の脅威を見せつけた。理不尽だと怒りさえ覚えたが、生き残った者としての使命を感じる日々です。

特定非営利活動法人みえ
NPO ネットワークセンター

代表理事 伊井野 雄二



私たちは、ボランティアとしての被災地支援のあり方を検討しています。今後ともみなさんのご協力をお願いします。

三重県ボランティア連絡協議会

会長 泰道 詞子

※幹事団体2団体（三重県知事 鈴木英敬、および特定非営利活動法人みえ防災市民会議議長 山本康史）については、裏表紙等の挨拶にかえさせていただきました。

■スタッフ紹介



センター長 山本康史

日本と中国をまたにかけ、多忙な中でもしっかりとセンターを支える、幹事団体の長にして頼れる代表。



事務局長 若林千枝子

退職後の予定を返上し、事務局で采配をふるう。無敵の笑顔で発せられる「鶴の一声」の威力は絶大。



事務局長補佐 伊佐彰代

現体制発足前から事務局を支える重鎮。誰よりも早く電話を取る。ボラパックⅡ第19便で念願の山田町へ。

幹事会

(特非) みえ防災市民会議
(特非) みえ NPO ネットワークセンター
三重県ボランティア連絡協議会
(社福) 三重県社会福祉協議会
日本赤十字社三重県支部
三重県

会計・経理・文書・予算管理
スタッフ労務管理・物品調達など

総務班長 番家康文

電卓片手にいつも穏やか頼れる先生。
社会情勢には熱い一面も。



総務班

情報分析・収集発信・広報活動全般
ボラパック参加者の健康管理など

情報班長 山畑直子

実は元看護師。
ネコには甘い、タスクスケジュールには厳しい。



情報班

ボラパックの運行管理・現地支援
県内避難者支援全般など

対策班長 森本佳奈

元 JOCV スリランカ風味
多少の事では動じない。
全体調整能力発揮中。



対策班



業務補助員 谷畑哲男・松岡佑美

ボラパック経験者にて行程管理はお任せ。現地班とも息ぴったり。まさかのトラブル発生にも慌てず、細やかな心配りが光る。参加者管理、現地班との調整、写真データ・名簿管理、受付業務、県内避難者支援活動、ボラパック参加者アンケートの整理など、担当業務はてんこもり。



現地班 佐藤辰也・外館こずえ

まなびの時間、ニーズ把握、活動補助、マップ作成、関係機関・他団体との連絡調整と連携、ボランティア参加者の安全管理、山田町の情報収集、現地情報発信（ツイート・HP 記事）など。それぞれの人脈を駆使し、山田町内を（時には町外も）走りまわる多忙なふたり。



事務局長のつぶやき

「みえ発！ボラパックへの参加者が1,000人を超えそう」と聞いたのは、ボラパックをスタートさせてから2年目12月のことでした。初年度は約1週間、2年度は4日間、1,080キロの道のりをかけて被災地に赴き、活動に参加して下さった皆さんに心から感謝します。そして無事皆さんが帰ったその日、ふりかえりの場で聞く「想像していたのとは全く違う」「行かなきゃわからない気づきがいっぱいあった」「町の人から『みえボラさん』と声をかけてもらってうれしかった」「ボラパックの仕組みがあって参加しやすかった」「現地スタッフがいてくれたことに感謝！」等々の言葉にホッと胸をなでおろします。ひとりでも多くの方に現地を訪れてほしい。たくさん話をして、友だちをつくってきてほしい。そして山田のみなさんおひとりおひとりが、ひとときでも災害から離れて日常に戻り、笑顔になるお手伝いがしたいと願ってボラパックを送り出し続けています。

月に一度のスタッフ会議は三重と山田をスカイプでつないで全員参加で行います。入念な準備活動に始まり、今年度導入した「まなびのガイドさん」の手配や調整等々、スタッフ間の連携プレーは見事です。この体制で臨めるのは、スタッフ全員のやる気とプライドがあつてのこと、そしてそれを支えているのが三重県であり幹事団体、そしてボランティア活動支援金を寄せていただいた県民のみなさんということに思いを馳せると、三重県民としての誇りを感じずにはられません。

大規模災害で失われたものは、とてつもなく大きくて悲しい、でも得られたものがたくさんあります。このかけがえのない宝物をこれからも大切にしていきたいと思えます。